した故である。卽ち、發行の遲延により、本卷が世の待望に報ゆる所愈大なるを加へたものと信ぜられる。

尙ほ、卷頭に A. J. B. Wace 氏の Introduction がある。十二頁の短文であるが、以て Ridgeway の說に對する學界の動きを察する事が出來やう。(Cambridge University Press, 1931. 8vo, 30s. net 第一卷も昨年改版された。)〔水川〕

●THE REIGN OF TIBERIUS, F. B. MARSH.

グラックス兄弟の社會運動以來、約百年の間武力鬪爭に迄發展したローマ共和末期の內亂を統一し、ローマに再び平和と繁榮とを齎さんとした者のうち、特に注目さるべきはカエサルとアウグスツスとであつた。前者は當時尙强靱にローマ人の精神を指導して居るロマンドムを越えて、一路モナルヒーに突進して紀元四十五年のカタストローフを惹起し、後者は、一方に於ては、よくローマ精神を尊重し、他方に於ては、偉大なる個性の出現とその統治を翹望する社會的要求に應じて、此處に政治形態としては共和的な元老院政治と、事實上 predominat な意味に於て彼の專政とを含む、所謂 principate を創立した。此二元的な政治形態が、ディオクレティアーヌス帝による純然たる一元的な Dominat 確立を見る迄如何なる歷史的過程を辿つたかは、ローマ帝政史上最も注目さるべきことに屬する。先に The foundation of Roman Empire を著して、アウグスツスの principate が如何にして、又何故に成立したかを詳述した者が、先づそれを繼承したティベリウスの政治傾向を研究した所以も亦そのためであることは、著者自身の手になる本書の序文及第八章に說く所によつて明である。

著者は先づ第一章 Tiberius and his Historians に於てティベリウスに關する根本史料として、タキツスの年代記、ディオ・カシウスのローマ史、スエトニウスの皇帝傳を擧げ、第一のものを以てその最上のものと說き、それに對して比較的詳細な批評をなして居る。而して一般にローマ人の手になる歷史に對しては The Romans

had but a weak perception of economic or political causation in human affairs and turned naturally to the personality of the actors to explain the course of events. と評し、タキツスにも亦此缺點ありと言ひ、We must judge Tiberius by what he did, considered carefully in the light of what we know of circumstances under which he acted, and not by the motives which Tacitus ascribed to him と結んで居る。此彼の歴史研究態度は歴史家としては餘りにも當然なものとは言へ、抽象的、シェマーテッシュな歴史研究に陷り易き現代の歴史研究者の味ふべきことであらう。第二章 The legacy of Augustus に於ては、アウグスツスの政治を叙述し、それが所謂 diarchy なることを論じて、特に注目さるべきものはない。唯、脚註に「通常 diarchy は emperor と senate との間の a division of the world と說明されるも、余は、アウグスツスに於けるそれは a division between the emperor and the republic といふをより正確なりと思ふ」と言つて居るのは、今後のアウグスツス研究者に大なる問題を提供したと言へる。第三章 The accession of Tiberius にては、ティベリウスにインペリウムが與へられたのはローマ國民によつてでなく元老院によつて〝あつたことを强調し、此事實は、彼の地位を an independent magistrate のそれから、a prime minister responsible to the senate の地位に transform したものと考へられると言つて居ることは、前記の脚註と併せ注目さるべきであらう。更に本章にて著者は ティベリウスと元老院との關係を、元老院内外の舊貴族と新貴族との對立を觀、その兩者に對する各事實を通してみられる彼の態度に於て考察して居る。第四章は Germanicus とティベリウスとの暗闘と、ゲルマニクスの遠征とを叙述して居るが、その暗闘も單に兩者の個人的な暗闘として說かれ、それがローマ史上如何なる意味のものであるかといふことに對しては何らの考慮も及ぼされて居ないことが本章の最大缺點である。第五章 The early government of Tiberius in Rome. にては、少くとも紀元二三年迄は、彼の内政的態度が極めて公正にして平和的であり

元老院と協調的であつたことを、多く當時の告訴事件を通して述べ、第三章 Tiberius and the Empire に於てはティベリウスの屬州に對する政策を論じ、大體に於て彼がアウグスツスと同樣に、境界の防禦、屬州民の平和を維持することをその政策の骨子とせることを詳述して居る。第七章 the struggle for the succession に於て Sejanus を中心として、後繼者爭ひたる御家騷動を詳細に述べ、その子 Drusus の死後彼の心境の變化について述べ、第八章 The close of the reign に於て、セヤヌス沒落以後、彼の政策が despotism に變じたことを多くの裁判事件に於ける彼の行動によつて論じて居る。著者は云ふ、The principate of Augustus was dead and despotism stood forth undisguised. It is true that theory of the constitution remained the same and that the change was psychological rather than legal, but it was none the less real und significant. と。

本書は、時として心理解剖の獨斷を含み、或は史料に則するの餘り、ゴシップ的な事實をも、他の歷史事實とは無關係の姿に於て述べてゐる等の缺陷あれど、ブリンチベートから帝政への過渡期として、ティベリウスの晩年の政策を despotism と觀る等、ローマ史研究者には興味を起さしめるものを多く含んでゐる。本書は尙 The sources of Tacitus 他數篇の附屬論文あり、ローマ史研究者には是非一讀をすゝめ得るものである。（本文、二二九頁、附屬論文一八一頁 Oxford University Press. 1931.）

〔井上〕

● Das Mittelalter (in Einzeldarstellungen)
"Wissenschafts und Kultur" Bd. III
Leipzig und Wien 1930

維納大學では、學者の公開講演（Volkstümliche Vorträge）を催した後、それを Wissenschaft und Kultur と言ふ叢書の形で屢次出版しつゝある。本書 Das Mittelalter は一九三〇年に此の叢書の第三卷として現れたものである。

獨逸史學の本據である伯林大學が、前世紀以來の傳統